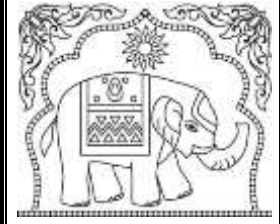




まいとりに मैत्री

No.13 平成23年度 夏号 —2011. 7. 26—
東洋大学仏教青年会・東洋大学仏教会発行機関誌



< मैत्री > :maitrī (マイトリー) とは、慈しみ、友情、思いやりを意味する古代インドのサンスクリット語です。

仏教では慈(いつくしみ)・悲(あわれみ)・喜(よろこび)・捨(とらわれない心)という四つの広大な利他の心(四無量心)の一つです。

増上寺“蔵”巡り

徳川家の菩提寺として広く親しまれている増上寺と増上寺秘蔵の仏画が展示されている江戸東京博物館に私たちは行ってきた。5月15日のよく晴れた日曜日、総勢15名である。



増上寺は1393年に浄土宗第八祖の西誉聖聰(ゆうよししょうそう)上人によって江戸貝塚(現在の千代田区紀尾井町)に創建されたお寺である。現在の位置(港区芝)に移動したのは徳川家康公が入府を受けたとき、1359年のことである。その後、廃仏毀釈や昭和の戦火によってほとんど焼失するが、1971年に始まった本格的な復旧により大殿や開山堂などが建立され、現在の姿にいたる。広大な敷地を有しており、東京タワーを背景にしている。

5月15日はこの増上寺にある経蔵が一般公開されている日であった。経蔵には徳川家康が寄進した宋版、元版、高麗版の大蔵経が収納された自由に回転できる八角形の木造輪蔵が安置されている。この輪蔵は回転させるとお経を全部唱えたのと同じ功德が得られるといわれている。

増上寺の見学後、私たちは特別展「五百羅漢」を見るために江戸東京博物館に移動した。「五百羅漢」とは幕末の絵師・狩野一信(1816~63)が描いた掛け軸であり、普段は増上寺に奉納されている。掛け軸は全部で100幅あり、2幅で1つのストーリーを描いている。2幅で平均10人の羅漢が描かれているので全部で500人の羅漢になるのである。

この「五百羅漢」は描かれてから150年の歳月が経っている。それにも関わらず、色褪せていない。さらに表情も細やかでとても生き生きとしており、絵を眺めていると羅漢の話し声が聞こえてくるようである。最後の4幅は画風が突然変化する。これは作者の一信が96幅まで描き終えたところで病没し、妻と弟子が描いたからである。完成はしなかったものの、病没するまで描き続けていたこれらの作品はまさに狩野一信の魂の作品といっても過言ではないだろう。

増上寺の“蔵”である経蔵と増上寺秘“蔵”の仏画である「五百羅漢」、これらのように時代をこえられるものというのは少ない。どこかでこのように時代をこえたものを発見した時はふらりと立ち寄ってみたいものである。

遠藤耕治(インド哲学科4年)

【目次】

増上寺“蔵”巡り	……1	コラム「仏教人物列伝」⑨	……6
聲明公演	……2	コラム「仏教と日本文化」⑩	……7
語学勉強会報告	……2	書籍・イベント情報	……9
講演会—韓国仏教の姿—⑤	……3	今後の予定	……10
タイの仏教事情⑦	……5		

《聲明公演》 ～五感で感じる仏教文化～

5月28日、土曜日、白山キャンパス井上円了ホールにて、平成23年度・東洋大学文学部伝統文化講座（仏教会・仏教青年会後援）と称し、本年もまた、聲明公演と公開講演が行われた。

第一部は、仏像ガールと称する廣瀬郁実さんによる“感じるからはじめよう！仏像の旅”と題する講演だった。彼女が旅先で出会った仏像の数々を、その周りに息づく人々の思いや生活を紹介しながら、とてもアットホームな雰囲気では進んだ。彼女が仏像の写真を見せる時、参加者が、各自、その仏像を感じることをアレコレ反芻できるように、少し時間をおいたり、クイズを出題して参加者とのやりとりを大切にしたり、廣瀬さんの配慮や工夫にとっても感心させられた。大学時代に仏教美術を学び、その頃は年代や製造工程にばかり目を向け、心で感じることを忘れていたという反省から、彼女は仏像ガールの活動をはじめたそうだが、改めて、仏教学を学んでいる小妹も、それがまた人の心や生活に寄り添っているものである、ということ念頭に置くことが大切だと思った。

第二部は、真言宗豊山派・迦陵頻迦聲明研究会の僧侶の方々による、聲明公演「祖師への不断の祈り」と「六大響」と題された和太鼓の演奏があった。聲明（しょうみょう）とは、インドから中国を経て日本へ伝わったもので、仏教の儀式の際、経典に節をつけた「讚」が詠われるようになったものである。また、日本古典音楽の源流となるものとも言われている。

聲明というと、個人的には、数年前、江戸川区のジャズクラブで聲明ライブを行っている僧侶がいるという話を新聞で読んで、聴きにいったことを思い出す。規模の差もあると思うが、その時の高野山派のものと違って、今回の豊山派の聲明は随分長く感じた。（後で伺ったところ、実際長いとのこと。）長いからか、正直、寝てしまう人もチラホラいたが、小妹は、それが一概に悪いサインではないと思う。それだけの安心感があるという証だ。弘法大師への御影供（供養）なのであるが、厳かさや華やかさが紡ぎ出す透明感で、聴衆の心も癒してくれるものだと感じた。それと共に、聲明の音楽的一面も興味深かった。小妹は楽器好きなので、使用されている楽器がどういうものか、時間がある時に調べてみたい。今回の公演は本学文学部の田中文雄非常勤講師による「御影」の解説付きだったので、場面が変わる度、それがどういった意味なのか理解できて大変良かった。また、聲明公演の後の和太鼓演奏の「六大響」も、なかなかの迫力で、また声明とは違うダイナミズムを堪能できた。

今回の文化講座に携わったの方々のご尽力を労うとともに、心から感謝の意を表したい。

梅田愛子（インド哲学科3年）



《語学勉強会》 ～チベット文献講読会～

東洋大学仏教青年会チベット語勉強会は、講師に石川美恵先生をお招きして、隔週月曜日の夕方 6 時半から 8 時まで現在、7 名ほどの参加者で行っております。ゲルク派の開祖ツォンカパの『菩提道次第広論(Lam rim chen mo)』をテキストに参加者全員で担当を決め輪読を行い、2008 年から始まり今年で 4 年目を迎えます。

『菩提道次第広論』は小士(在家者)、中士(出家者)、上士(大乘仏教者)の行うべき修行の道を段階的に説くもので、勉強会では上士の入門修行の儀軌、六加法行が説かれる「菩提心の儀軌」の章を講読しています。昨年は、2009 年から 2010 年の間行われた勉強会の成果として、『菩提道次第広論』「菩提心の儀軌」の章「1. 得ていないものを得させること(儀軌を受ける)」部分のテキストと和訳、また巻末には単語帳を付した小冊子を先生を主体に勉強会参加者全員で担当を分担し、協力して発行しました。



勉強会に参加し始めた頃は、チベット語は基礎文法を習った程度でチベット語のテキストをきちんと読んだことがない、という状態で、単語も動詞もどれが何なのか分からず、どういった風に読んでいけばいいのか、どう文章としてつなげればいいのか、とにかく何一つ全くわからない状態でした。そんな状態で講読会に参加し始め、難しすぎてわからないことが多くやめたいと思ったこともありましたが、石川先生はやさしく、丁寧、親切そして熱心に私たちを指導してくださいました。今もずっと、難しすぎて出来ず嫌気がさすことがありますが、やりたくないと思っても読めるようにはならないので、大変ですが逃げずに取り組むと以前よりは少し成長したかな、と感じています。今後も、一歩ずつ継続して勉強を続けていこうと思います。

藤森晶子 (大学院仏教学専攻博士後期課程 2 年)

《講演会》

韓国仏教の姿 ー日本仏教の源ー⑥

次は律宗についてですが、577 年に百済から律師などが遣わされる記録があり、その後、慧便に授戒の法を聞いて、善信尼らが百済まで行きました。観勒は 624 年僧正になりますが、それに先立って戒律のことを強調しています。石田茂作先生の指摘なさるように、鑑真が日本へ来る前に、律宗が成立していたことは日本仏教史上、注意すべき点でしょう。新羅、高句麗、百済に正式に具足戒を受ける制度が定着していたならば、日本においてもその制度が既にあった可能性が高くなります。また、景戒の『靈異記』には、新羅仏教の主要な人物の一人である太賢の『梵網経古迹記』との関わりが指摘されています。したがって、新羅と菩薩戒との関連も無視できないと考えられます。

以上に述べたように、奈良時代には韓国仏教との密接な関係により各宗派が形成されますが、平安初期に入ると韓国仏教との関連は薄れていきます。このように日本仏教は平安時代に入ると独自の路線を歩み始めますが、それでも平安初期までは新羅仏教と深い関係を保っていました。

まず、平安時代の天台宗における新羅仏教の交流の中、新羅零妙寺僧、不可思議撰『大毘盧遮那経供養次第法

疏』(以下、『供養法疏』)(T39, No.1797)との関係は注目すべきです。『供養法疏』が初めて引かれたのは安然の『真言宗教時義』(T75)です。以後、『供養法疏』は東密にも用いられ、宥範(1270-1351)は『大日経供養次第法疏私記』を著述しました。

次に元暁の他に義相(湘)や義相系の人物や書物が、日本の華嚴宗に新たな影響を与えたことも重要です。それらによって日本華嚴宗は変容を余儀なくされました。特に『華嚴経問答』の影響力は測りしれないものがあります。これは、今日、義相の講義録と言われていますが、古くは法蔵のものとして認識されました。その結果、華嚴教学の一般とは異なる『華嚴経問答』の三乗廻心説は、議論はあったものの受容されるに至り、江戸時代の華嚴宗に議論を起しているほど影響力を持っていました。もう一つ、理相即説についても同様の問題が起りました。これは義相の説で、法蔵の説ではありません。しかし、日本ではこの説を智儼に遡れるものと認識し、論議のテーマとなっているほど、定説として認められています。

最後に鎌倉時代の明恵の考えた元暁と義相について、簡単に述べて本日の話をまとめたいと思います。高山寺伝『華嚴縁起』は、日本僧のもっていた韓国仏教のイメージを見るのに格好の材料です。これは明恵の理想像の投影ではありますが、その物語には新羅仏教の姿が巧妙に描写されています。以上で終わりにさせていただきます。ご静聴ありがとうございました。(完)

2010年1月27日 於東洋大6号館
(金 天鶴 金剛大学校仏教文化研究所 所長)

～タイの仏教事情⑦～

—タイ仏教教育の歴史と現状(4)—

前号では、パーリ語教育と第一段から第五段までのパーリ語国家試験について紹介した。今号では、残りの第六段から最上級である第九段まで紹介したいと思う。

第六段、タイ語訳からパーリ語化する課目とパーリ語をタイ語に翻訳するという二つの課目がある。パーリ語化の教材は、タイ語訳ダンマパダ第五冊～第八冊にしているが、タイ語訳するには、律蔵の註釈書『サマンタパーサーディカー』(*Samantapāsādikā*)が学習の対象とされている。本書は、五世紀初頭に、スリランカにおいて活躍していたブッダゴーサ(Buddhaghosa、仏音)という有名な学僧(註釈家)の作品であるとされている。ブッダゴーサは三蔵に対する註釈文献を著す際に、当時存在していたシンハラ語の古い資料を参照したといわれている。



パーリ語第九段の合格僧侶は国王より表彰を受ける

タイのパーリ語教育では、本書を決まった形式の訳文にして、5冊に分けている。第六段では、第三冊から第五冊までを使用しているが、第七段では、第一冊と第二冊を教材にしている。それは分量として、第一と第二冊の方が多からである。また、パーリ語化の課目には、前号で紹介した『マンガラッタディーパニー』の第一冊が用いられている。

第八段では、パーリ語化と翻訳以外、パーリ語韻文を作成する課目がある。この課目は、現存する唯一のパーリ語韻律論である『ヴットーダヤ』(12世紀成立)を使用している。本書では、108種の韻文形式が説かれているが、その中の6種しか学習の対象とされていない。少ないように思われるかもしれないが、実際にそれらを学習して

いる僧侶たちに尋ねてみる、6種の韻文を学ぶだけでも大変苦勞しているそうである。パーリ語化の課目には、『サマタパーサーディカー』第一冊を用いているのに対し、翻訳する課目は、上座部仏教の修行道論を説いたの有名な文献である『清浄道論』(Visuddhimagga)とその註釈書である『第一義宝函』(Paramatthamañjūsā)を教材にしている。前者は、ブッダゴーサの作であるが、後者は、ブッダゴーサより多少後輩のマハーダンマパーラ(Mahādhammapāla、大護法)の作である。



パーリ語第九段に合格した沙弥

さて、最上級の第九段には、どのような課目があるのかというと、基本的のパーリ語化と翻訳という課目は変わらないが、高い壁はパーリ語化にある。つまり、『サマタパーサーディカー』の第一冊を教材にするだけではなく、普通のタイ語の文章をパーリ語化する課目を習得することになっている。試験を受ける際には、かなり長い文章が出題され、試験時間内に終わらせなければならない。また、一つの間違ひも許されないという。このような、厳しい審査があるため、毎年第九段を取得する者は多くない。

また、第九段合格者と第六段の合格者のために、特別な授与式が行なわれる。普段であれば毎年国王がこの儀式に出席され、僧侶に対し賞などを献上されるが、数年前からは王子が代表として参加されている。また、第九段に合格した22歳未満の沙弥のために、特別な出家式が行なわれている。現在、タイの僧団を運営している大長老会の委員のほとんどが過去にこの第九段合格者ばかりである。

プラチャッポン (Phramahāchatpong Katapuñño)

大学院仏教学専攻博士後期課程3年

～コラム「仏教人物列伝」⑨～ ゴータマ・ブッダ その九

⑦てんぼうりん転法輪しょてんぼうりん(初転法輪) つづき

いよいよ初転法輪です。アージーヴァカのウパカと別れた後、釈尊は遊行を続けて、かつて共に苦行を行った5人の仲間—コンダンニヤ(カウディンニヤ)、バツディヤ(バドラカ)、ヴァッパ(ヴァーシュパ)、マハーナーマン、アッサジ(アシュヴァジット、アシュヴァキン)の5人—のいるバーラーナシー(ヴァナーラス、ベナレス)のイシパタナの鹿野園にやってきました。ウツタル・プラデーシュ州東部のバーラーナシーの北およそ6kmに位置する、現在サールナートと呼ばれるところです。空を飛ぶ仙人(イシ)たちがここに降りて(パタナ)休息してからまた飛び立つ場所ということで「仙人墮処」という訳語も知られていますが、「仙人たちが集まる場所」という解釈もあります。鹿が安全を保障されて自由に歩き回る園があったようです。ちなみにブッダガヤーとサールナート間の距離は、直線でも200km以上ありますので、釈尊が一日でこの距離を踏破したというような伝承は、とりあえず現実的ではありません。

さて、遠方からやってくる釈尊を見て、5人の仲間は「むこうから沙門ゴータマがやってくる。彼は苦行を放棄して贅沢になってしまった。礼を尽くす必要はない。立って迎えるまでもなからう。衣と鉢をとってあげること

もない。しかし席は設けてあげよう。坐りたければ坐ればよい」などと示し合わせていましたが、釈尊が近くに来ると、威光に打たれたのか、取り決めは反故になり、みな立ち上がって釈尊を迎え、衣と鉢をとり、足を洗う水なども用意してしまいました。

しかし5人は釈尊に対して「ゴータマよ」とか「ねえ君」とか話しかけました。それを釈尊は「諸比丘よ、気安く私を名前で呼んだり、『君』などと話しかけたりしてもいけない。なぜなら私は正等覚者になったのだ」と言って制止しました。すると5人は「あのような苦行でも悟れなかったのに、今や贅沢になってしまった君に、どうしてそのようなことがありえるのか」と疑念をあらわにします。釈尊は「如来は贅沢になったのでも、努力を捨てたのでもない」と言い返します。

このやり取りを3回繰り返した後で、釈尊は「私が今までにこのようなことを言ったことがあったかね」と尋ねます。原文のテキストを注意深く見てみますと、この問いへの5人の返事は「いいえ、尊師よ」です。ここでようやく5人は名前や「君」(āvuso)で釈尊を呼ぶことをやめたようで、「尊師よ」(bhante)と呼びかけています。釈尊がもう一度「私は正等覚者になったのだ」と主張すると、ここでようやく5人を説得することに成功して、説法の開始となります。

以下、この最初の説法とされるものを①～④の4段階に分けて紹介します。

①釈尊は5人が苦行に凝り固まっているのをご存じなので、まずそこから崩す必要があったのでしょうか。といっても「苦行はよくない」などと真っ向から否定しても聴く耳をもたないでしょうから、欲楽に耽る生活ももちろんだめだし、いたずらに自身を疲れさせる苦行も無意味であるとして、中道を勧めます。そしてその中道の具体的内容は正見・正思・正語・正業・正命・正精進・正念・正定の八正道であるということです。その次に四諦(苦・苦の原因・苦の滅び・苦の滅びにいたる道)を説いて、その文脈においては苦滅道聖諦(苦の滅びにいたる道)が八正道であるとしています。

そして段階を経て、最終的に、苦の様相をあまねく知り、苦の原因を完全に断じ、苦の滅びを目の当たりにし、苦の滅びにいたる修行道を修めた時に、私は正等覚者になったと説きます。

ここまでの説法でコンダンニャが聖者の最初の境地である預流果を得ます。釈尊が「コンダンニャは実に理解した」(aññāsi vata bho koṇḍañño)とふと言葉をもらされたことから、コンダンニャには「理解したコンダンニャ」

(Aññāta-Koṇḍañño)というあだ名がつけました。コンダンニャは釈尊に出家を願い出て許されます。

②さらに説法して、ヴァッパとバツディヤが預流果を得て出家します。

③さらに説法して、マハーナーマンとアッサジが預流果を得て出家します。五比丘の全員が預流果を得たところで—

④まず五蘊(色・受・想・行・識)が無我であることを説き、つづけて少し繰り返すようにして、五蘊のそれぞれは無常であり、苦であり、無我であるので、いずれも「これは私のものである」(etaṃ mama)と

か、「私はこれである」(eso 'ham asmi)とか、「これは私の我である」(eso me attā)と考えるのは適当ではないと説きます。そして、このようにあるがままに、正しい智慧をもってはっきりと知れば、五蘊を厭うようになり、欲から離れ、解脱すると締めくくります。

この説法で五比丘の全員が阿羅漢になります。

以上、簡単にですが、パーリの『律蔵大品』によって五比丘が阿羅漢になるまでの次第を見てまいりました。注意しなければならないこととして、パーリの『相應部經典』では①と④は独立した別々の経として扱われていますので、解釈する際にならざるも一連の説法として理解しなくてもよいということが言えます。また②③で

説かれた内容が、完全に省略されていますので、釈尊の説法は実際のところは、これほど形式的なものではなく、もっと微細にわたるものであったに違いありません。それから、後代の註釈書では初日にコンダンニャが悟り、その翌日にヴァッパがというように、一日に一人を預流果に入らせ、5日目にアッサジが預流果を得た後で④を説いたとされていますが、これも型にはめられた記述と思われま

最後に「五蘊無我」について付言させていただきます。よく目にする解釈として、『五蘊のそれぞれが我ではない』と言っているだけなので、『我はどこにもない』とは言っていない。だから『無我』ではなくて『非我』というべきだ。釈尊は我でないものを我とみなすことを否定しただけであって、否定されない『我』があり、それは『真我』である」というものがあります。しかしながら、五蘊は「一切法」と同義語であり、この分析方法に余りがあることは意図されておりません。本を例に挙げれば、色のついた頁を探していて、一頁ごとにしらみつぶしに全頁を確認してどの頁も白ければ、「この本には色のついた頁はありませんでした」という結論になります。五蘊ですべてであるという前提で、五蘊のどれも我ではないと言うのですから、「我はありませんでした」と言っているのです。「いや、何色か分からないけど、やっぱり色のついた頁はこの本の中にあるはずだ、なきや困る」と言うなら、「飛ばした頁があるに違いない」と言ってせっかく探してくれた人を疑うのと同じことになります。

岩井昌悟（東洋大学仏教会事務局局長）

～コラム「日本文化と仏教」⑩～

万葉人の仏教観

仏教会会員 作家 永田道子

万葉集の編纂者とされる大伴家持（やかもち）の父旅人（たびと 665-731年）は大宰帥や大納言を歴任した有能な政治家だったが、大の酒好きで知られ、酒を讃える一連の歌をつくった。

「酒の名を聖（ひじり）とおふせし古（いにしへ）の大聖（おおきひじり）の言の宜（よろ）しさ」巻第三

駄作は駄作とばっさり切って捨てる折口信夫も「濁酒（にごりざけ）は賢人、清酒（きよき）は聖人と名をつけた古の偉い聖人の言は実に当を得ている。隅に置けない」と笑いを含んだ解釈をしている。濁酒は庶民が気軽に飲めるどぶろく、清酒は貴族階級が飲む高級酒である。本当にそういう譬でもあったのか、それとも大酒呑みのジョークか。なかなか洒落た粋人だが、ついにはこんな放言までしている。

「賢（さか）しと物言ふよりは酒飲みて酔（ゑ）ひなきするし勝りたるらし」

「あな醜（みにく）賢しらすと酒のまぬ人をよく見れば猿にかも似む」

「なかなか人とあらずは酒壺になりてしがも酒にしみなむ」

（利口ぶって偉そうなことを言うより、酒飲んでクダ巻いてるほうがましでもんよ。酒を飲まぬやつらを見てみる。醜（みにく）いったらない。猿そっくりだぜ。人として生きるよりも、いっそのこと酒壺になりたいもんだね。そしたら思う存分、酒につかっていられるだろ。）

「現世（このよ）にし楽（たぬ）しくあらば来世（こむよ）には虫にも鳥にも我はなりなむ」

現世を思う存分楽しんで生きられさえすれば、来世は畜生道へ堕ちて虫にも鳥にもなろうじやないかというのである。いかにも享乐的だが、頹廢や世を拗ねての自己韜晦（とうかい）はなく、おおらかで開放的な万葉人の面目躍如というべきか。

もともと日本では、『古事記』にあるように、死者は地下の黄泉国か海の彼方の常世国へ行くものとされ、葬送

2011年7月26日

まいとりの No.13

の地は隠国（こもりく）といって黄泉国の入口と考えられており、輪廻や六道の概念はなかった。仏教伝来から150年以上を経てようやく、個人の、ことに知識階級の死生観のレベルにまで浸透してきた時代だが、それでもまだ古来の死生観が混在している。

「隠国の泊瀬（はつせ）の山に霞立ちたなびく雲は妹（いも）にかもあらむ」（巻第七 挽歌 読人知らず）
（火葬場の泊瀬の山にたなびく雲は、煙となって天へ昇っていく愛しい女が名残を惜んでいるのかも。）

「禍言（まがごと）か妖言（およづれごと）か隠国の泊瀬の山にいほらせりとふ」（巻第七）
（他人はお前の愛しい女は墓のある泊瀬の山でいまも生きていうけれど、心を惑わす偽りにきまっている。そんなことがあるものか。）

「世の中は誠（まこと）二世は行かざりし過ぎにし妹に逢はなく思へば」（巻第七）
（この世界は二度と生まれてこられぬものだというけれど、死んでしまった愛しい女に逢わないところを見ると、実際そうに違いない。）

先の大伴旅人も太宰府赴任中、都から伴った最愛の妻女を失い、自らも病床に伏した。そのときの悲嘆の歌が巻第五に収められている。

「世の中は空しきものと知る時し いよよますます悲しかりけり」
（仏法ではこの世に存在する物質も現象もすべては同時に空であると説いているが、悲しいことに初めて、この世界はすべて仮の形であり、無常なのだ痛感した。悟りをひらけたのだから安心できそうなものなのに、何も考えず何も知らず、わからぬままにいた頃よりも、さらに悲しみが増し募ってしまうことだ。）

そう悲嘆にくれる旅人を慰めるために、部下である山上憶良は序賦と挽歌を捧げた。

「神亀五年（728年）六月二十三日、

蓋し聞けらく、四生の起滅することは、方に夢の如くにして皆空しく、三界の漂流することは、環（たまき）の息（や）まざるに喩ふてへり。所以に維摩大士、方丈に在しても染疾の患を懐くことあり。釈迦能仁双林に坐しても、泥洹の苦しみを免るること無かりき。故に二聖の至極なるさへ力負の尋（つ）ぎて至るを払ふこと能はざりしを知りぬ。三千世界、誰か能く黒闇の搜り来るを逃れむ。二鼠競ひ走りて、而も目を渡る鳥は旦（あした）に飛び、四蛇争ひ侵して、而も隙を過ぐる駒は夕に走りぬ。嗟乎（ああ）痛しい哉。

紅顔、三従と共に長く逝き、素質、四徳と与（とも）に永（とこしな）へに滅びぬ。何ぞ図りきや、偕老、要期に違ひ、独飛、半路に生ぜむとは。（中略）泉門一たび掩（おほ）へば再見るに由なし。嗚乎哀しい哉。

愛河波浪已先滅 苦海煩惱亦無結 從來厭離此穢土 本願託生彼淨刹

山上憶良といえば、「瓜喰めば子ども思ほゆ 栗食めばましてしぬばゆ。いづくより来たりしものぞ」と詠い、「銀（しろがね）も黄金（こがね）も玉もなにせむに優れる宝 子に如（し）かめやも」の歌がよく知られている。

「釈迦如来の金口、正に説き給へらく、等しく衆生を思ふこと、羅睺羅の如くすと宣ひ、又、愛むことは子に過ぎたるは無しと説き給へり。至極の大聖すら尚、子を愛む心あり。況めや、世間の蒼生（あをひとくさ）誰か子を愛まざらむ」

すでに仏教は人間の感情をカバーするものになっているのである。たとえば、家持と恋愛関係にあった笠郎女（かさのいらつめ）は、こんなふうにつれない恋人をやりこめている。

「相想はぬ人を思ふは大寺（おおでら）の餓鬼の後（しり）へに額づくがごとし」

（大寺に餓鬼の絵がありますけれど、とても人間とは思えないあさましい姿です。わたくしを想ってくださらないあなたに恋焦がれるなんて、まさにその餓鬼の後ろ姿に向ってお辞儀をするようで、腹が立つたらありませんわ。女の気持がわからない男なんて、餓鬼以下ってもんですよ！）

《書籍・イベント情報》

○《書籍》

・『阿頼耶識の発見—よくわかる唯識入門』

横山紘一/著 (幻冬舎 798円)

唯識とは、『西遊記』で知られる玄奘三蔵がインドから中国に伝えた仏教思想の根本。それは「人生で起こるどんなことも、心の中の出来事にすぎない」という教えであり、執着や嫉妬、怒り、絶望、失敗はすべて心の深層部の仕業だと説く。この心の最深部を「阿頼耶識」と呼ぶ。心の表層に生じる感情や思考は、阿頼耶識にもれなく蓄積され、それが無意識のうちに表情や体調となって現れ、美醜にも影響する。表層と深層が常にリンクするという心の構造がわかると、シンプルに強く生きられる。ストレスの多い現代人に向けた心の教科書。

・『誰でもわかる維摩経』

菅沼晃 (大法輪閣 1995円)

ドラマティックで縦横無尽、そして新鮮な世界が新訳とともに広がる。数ある大乘経典の中でもユニークな経典をインド哲学の第一線にいる筆者が現代人に向けやさしく解説。

・『唯識 さとりの智慧—『仏地経』を読む』

長谷川岳史 (春秋社 2310円)

私たちの心のあり方を分析し、仏陀の悟りの世界を濃密に描く『仏地経』。玄奘三蔵が訳した唯識思想の重要経典をわかりやすく全文解説する、仏教入門。

・『隠元禅師と黄檗文化』

木村得玄 (春秋社 3150円)

黄檗宗研究の第一人者木村得玄氏の最新刊。隠元とその弟子の渡来僧の事績について、文献類や仏像・仏具類、独特の梵唄(声明)等も解説する。また、黄檗宗の日常の読誦経典、梵唄、施餓鬼に関する文献解説は、非常に有益。

・『吉野修験 大先達の遺訓』

五條順教 (金峯山寺 1575円)

吉野に生まれ山伏として活躍し、約40年にわたり金峯山修験本宗の管長を務めた著者が、実践の中から湧きでた生き方・修行の極意を述べる。実践実修の道を歩んだ大先達ならではのストーンと心に響く名言にあふれた一冊。

○《イベント》

7月から9月には各地でお盆やお彼岸の行事があります。今夏も猛暑になりそうな気配がありますので、ご自愛の上でご参加下さい。

● 世界文化遺産「平泉の文化」記念イベント

6月に世界文化遺産に指定された平泉では、以下の記念イベントと毎年恒例のイベントがあります。避暑を兼ねて平泉の仏教文化を味わえる貴重な機会です。

《記念イベント》

○「瀬戸内寂聴&山田俊和中尊寺貫首 公開対談」

日時：9/3 (土) 15時～

場所：財団法人奥州市文化振興財団

奥州市文化会館 Z ホール

(岩手県奥州市水沢区佐倉河字石橋 41 番地)

Tel: 0197-22-6622

※入場料無料、要整理券

○観自在王院跡「県内郷土芸能の共演とグルメ祭典」(予定)

日時：9/24 (土) ～25 (日)

《恒例イベント》

○中尊寺「薪能」：8/14 (日)、夕方から

(S席1万円、A席7000円、B席4000円、学生3000円)。

○「平泉大文字まつり」：8/16 (火)、夜から。

○毛越寺「萩まつり」：9/15 (木) ～9/30 (金)。

● 東京国立博物館 特別展「空海と密教美術展」

空海が唐から請来した経典や仏具、自筆の書、日本で造らせた仏像など、空海ゆかりの作品や真言密教の名品を観覧できます。展示品のほぼ全てが文化財で、会場全体が密教宇宙を表す大曼荼羅となります。

日時：7/20 (水) ～9/25 (日) 9時30分～17時

(金曜は20時まで、祝祭日は18時まで)

会場：東京国立博物館 平成館

観覧料：一般1500円、大学生1200円

※休館日は月曜です。

● 鎌倉国宝館 企画展「仏像入門～みほとけをひもとけ～」

仏教の世界をより身近に感じるため、仏像の種類やかたち、仏像の材質や作り方といった、ほとけさまの見方を紐解いていきます。仏像のひみつを知ることで、昔の人々が仏像にどのような願いを込め、また今日まで大切に守り伝えてきたのかを考えていきます。

日時：7/7 (木) ～8/28 (日)

9時～16時30分

観覧料：一般400円

2011年7月26日

まいとりの No.13

住所：神奈川県鎌倉市雪ノ下2-1-1 鶴岡八幡宮境内

※休館日は月曜です。

～ 東洋大学仏教青年会・仏教会、今後の予定 ～

※勉強会についてのお問い合わせは下記の連絡先をお願いいたします。(会員は無料で参加できます。)

《定例研究会》

毎月一回、打ち合わせ後に「大智度論を読む」を行います。

10月26日(水)、11月30日(水)

12月22日(木) 定例研究会兼忘年会

14時40分～16時10分

会場：文学部会議室

《語学勉強会》

○仏教漢文講読会

講師：橘川智昭

会場：5303教室

日時：隔週木曜4限

『法華経』を読みながら漢文の読み方と仏教の思想を学ぶ。

○サンスクリット文献勉強会

講師：出野尚紀

日時：隔週水曜日の6限

内容：『ブッダチャリタ』を読みます。初心者大歓迎です。

○チベット文献講読

講師：石川美恵

日時：隔週月曜 18:30～19:30

内容：ツォンカパの『ラムリム』「菩提心の儀軌」の章を読みます。チベット語初心者も歓迎です。

会場：インド哲学科共同研究室

参加希望者は石川<danakoshajp@yahoo.co.jp>までご連絡下さい。

《各種研修》

○9月17日(土)・18日(日) 夏期研修旅行 福島県会津地方、恵日寺などをめぐる。

○本門寺のお会式「萬燈練り供養」

日時：10月12日(夜)

集合：東洋大学正門前17時

場所：大田区池上東京都1-1-1

○11月下旬 インド独立の闘志たちの足跡を巡る(宮本久義先生) 新宿中村屋など。

東日本大震災に関して、仏青として特別に復興ボランティアを組織するなどはありませんが、東洋大学の「復興応援プロジェクト」が随時に行われていますので、友人を誘って参加して下さい。詳細は以下のHPをご覧ください。

東洋大学東北応援プロジェクト

http://www.toyo.ac.jp/news/detail_j/id/4199/

* <語学勉強会>は資料等の準備がありますので、末尾に記載した仏青会長、または仏教会事務局長宛まで、あらかじめご連絡下さい。

※随時会員を受け付けています。入会希望者は下記までご連絡下さい。会員規約・活動内容・受付手続きなどの詳細はホームページ (<http://www.toyo-yimba.org>) をご覧ください。また、紹介したい行事や掲載したい記事などがございましたら、このアドレスまでご一報下さい。

編集責任者：文学部インド哲学科3年 鈴木伸幸

東洋大学仏教会

卒業生、一般：年会費3000円、特別賛助一口5000円

東洋大学仏教会事務局長 岩井昌悟

〒112-8606 東京都文京区白山5-28-20

東洋大学インド哲学科第8研究室気付

Tel: 03-3945-7393(-7357) E-mail: tba.bussei@gmail.com

東洋大学仏教青年会

学生：年会費1000円

東洋大学仏教青年会会長 藤森晶子

db1000016@toyo.jp

URL: <http://www.toyo-yimba.org>

